

茨城木工株式会社

代表取締役 泉 謙二郎 氏



茨城県神栖市に本社を構える茨城木工株式会社は、昭和48年1月に設立し、年間15万～20万枚の碁盤や将棋盤を製造しています。

その数は全国生産量の8割以上を占めており、囲碁・将棋文化を支えるトップランナー企業として走り続けています。

また、同社は業務拡張の一環として、平成2年4月から家具や建具、造作材の製造と販売を開始し、さらに平成3年2月からは木製エクステリア用品の製造、販売事業を展開しています。

今後も積極的に若い職人を採用し、確かな技術を後世に受け継いでいきたいと語る同社社長泉氏の熱い想いを取材しました。

インタビュー日：2018年6月11日
〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕
〔文・写真：筑波総研(株) 研究員 富山かなえ〕

企業概要

本	社：茨城県神栖市矢田部764-10
創	立：昭和31年4月
設	立：昭和48年1月
従	業 員：10名
事	業 内 容：碁盤、将棋盤の製造、販売
	家具、造作材の製造、販売
	木製エクステリア用品の製造、販売

泉社長のご略歴と事業に関わるようになった経緯についてお聞かせください。

■ 鹿島灘産ハマグリの碁石作りに携わる

私は波崎町（現 神栖市）出身です。地元の小中学校、茨城県立波崎高校を卒業後、東京都内のスポーツ用品問屋に就職しました。その後、数年で退職し、地元で母が切り盛りするスポーツ用品店に入社しました。

当時、この地は「鹿島開発」の業務に携わるサラリーマンや職人が多く訪れていました。夜を楽しむ店がまちに無かったことから、私は思い切って地元初のバーを開店し、店も大変繁盛しました。

私は店で知り合った人から紹介を受け、不動産業を営む茨城開発株式会社に入社し、約2年間、土地買収やゴルフ場開発事業に携わりました。

昭和31年4月、同社は当社の前身となる常陸工業株式会社を吸収合併しました。私はこの会社に移り、鹿島灘産ハマグりを原料とする碁石の製造、販売事業に携わるようになりました。

しかし、自然環境の変化に伴い、良質なハマグリが枯渇したことを受け、昭和38年6月、碁盤や将棋盤の製造、販売に事業転換しました。

■ 船大工などが碁盤・将棋盤の技術者に

旧波崎町は利根川と太平洋に囲まれ、舟運が盛んなまちでした。昭和30年代まで、この地には木船や樽を作る技術が根付いていました。

しかし、月日の経過とともに、船は木船から鉄船へ、輸送手段も樽から瓶へと変わり、船大工や樽職人たちの仕事は減少していきました。

そこで、当社は、木を扱うプロフェッショナルである彼らを碁盤や将棋盤の製作技術者として積極的に雇い入れていきました。

昭和42年8月、事業の合理化を図るため、当社は茨城開発(株)の木工部として事業を継続、拡張することになりました。その後、昭和48年1月、木工部の全業務を受け継ぎ、茨城木工株式会社として独立しました。

昭和50～60年代頃、囲碁や将棋は最盛期を迎え、必ず一家に1台は碁盤や将棋盤がありました。当時は同業社が近隣に6社ほど立地し、この地での生産量は全国シェア5割以上を誇っていました。

碁盤、将棋盤の製造方法と現在の御社の全国シェア率についてお聞かせください。

■ 全国シェア8割を誇る日本一の企業

碁盤や将棋盤は、樹齢150～200年ほどの木を使用します。まず、丸太から長めに角材を切り取り、水分を蒸発させるために自然乾燥させます。

加工がしやすい広葉樹のカツラは1～2年間、最高級品の針葉樹のカヤは5～7年間という長い乾燥期間が必要です。乾燥させることで、カビの発生防止、ストーブなどで室温が高くなった部屋での木割れ防止効果などが期待できます。

長期間寝かせた角材は短く製材し、さらに2～3ヶ月の熟成期間を取り、ねじれなどが激しい木をとことん暴れさせます。

熟成後、板の状態を一枚一枚丁寧に確認しながら、職人が盤の厚みと寸法を決定します。建築材は木表を使用しますが、碁盤や将棋盤は木の中心に近い木裏の柂目を使用します。

機械で盤に脚穴を開け、クチナシの花をイメージした脚を取り付けます。また、盤の裏の中央部分には、“ヘソ”と呼ばれる掘りを入れ、削り具合を見ながら全体を研磨していきます。

盤に線を盛る（＝目盛りを入れる）際、刀の刃先に漆を塗り、烏口の原理と同じようにインクを置いていくと盤上の目盛りが綺麗に出来上がります。最後に木ロウで艶出しを行い、美しい碁盤、将棋盤の完成となります。

この地で唯一残った当社は、年間15万～20万枚の盤を製造し、その数は全国生産量の8割以上を占めています。この業界を牽引してきた確かな技術と実績は私たちの誇りであり、明日への活力となっています。



木ロウでの仕上げの様子

時代の変化に合わせた事業拡大のプロセスについてお聞かせください。

■ 囲碁・将棋人口の減少に立ち向かう

当社は大阪府にある問屋との取引から始まり、納品した碁盤や将棋盤は全国の文具屋やおもちゃ屋、本屋などで販売されていきました。

しかし、20年ほど前から売上げは落ち込み、最盛期の4分の1程度になってしまいました。それは囲碁や将棋を楽しむ人が減少したこと、また、テレビゲームなどが流行し、子どもたちの遊び方が変化したことなどが要因と考えられます。

さらに、昔は脚が付いた碁盤や将棋盤を畳や縁側に置いて楽しんでいましたが、時代とともにフローリングに椅子やテーブルを置いて生活するスタイルが主流となり、床に座って囲碁や将棋を打つという習慣は失われつつあります。

当社は大手ゲームメーカーの任天堂（本社：京都市）と取引を始め、同社の社長と「今までどおり高級な厚い盤にするか、現代に合う普及品にするか」について熱い議論を交わしました。そして、気軽に囲碁や将棋が打てる普及品を主力商品として全国に売り出すことを決意しました。

■ 日本で初めて、目盛り印刷機を開発

普及品の盤を全国に流通させるためには、大量生産が不可欠でした。しかし、当時は12名の女性の一つひとつ盤上の目盛りを手書きする製法だったため、大量生産は困難でした。

そこで私は、機械で目盛りを印刷することを思い付きました。しかし、通常の印刷機を使うと線がベタツとした安っぽい仕上がりになってしまい、手作業のように盛り上がりませんでした。

その後2年間、私は理想の印刷機を求めて各地を探し歩き、遂に、知人から紹介された都内の町工場にたどり着きました。

その会社ではスクリーン印刷という技法を使い、ラジオ基盤に回路を印刷する技術を有していました。見せていただいた製品を指でなぞってみると、しっかりとした厚みがありました。

私は「これだ!」と確信しました。半年後に印刷機が完成し、12人分の1日の作業が1日3時間に短縮したことで、大量生産にも弾みがつきました。



これまでの歴史を語る泉社長（中央）

■ 消費者の声が機械の目盛り印刷を後押し

機械による目盛りの印刷技術は、任天堂から好評だった反面、問屋には不評で、取引は難航しました。問屋側は人の手で書いたものが一番、と信じて疑わなかったのです。

そこで、私は百貨店の商品棚に手作業で目盛りを書いた盤「1,000円」と機械で印刷した盤「1,200円」の2つを並べて販売する作戦に出ました。

すると、手作業の盤の方が安いにも関わらず、圧倒的に多くのお客さまが印刷した高い盤を選んで購入していきました。その様子を見た問屋はようやく折れ、一気に販路が開けました。

人財育成に対する想いをお聞かせください。

■ 日本文化を支える技術者の育成

現在、当社には9名の職人が在籍しており、その多くは熟練工です。このまま手を打たなければ、これまで当社が培ってきた碁盤や将棋盤作りの技術、そして、日本文化が途絶えてしまいます。

今後は積極的に若い職人を採用し、確かな技術を後世に受け継いでいきたいと考えています。



作業場では若い女性も作業している

今後の事業戦略についてお聞かせください。

木製エクステリアの製造事業を展開

当社は業務拡張の一環として、平成2年4月から家具や建具、造作材の製造と販売を開始し、さらに平成3年2月からは木製エクステリア用品の製造、販売事業を展開しています。

新たな事業展開のきっかけは、木材輸入のため東南アジア諸国を視察した際、現地の人々が庭にデッキを置いて、とても上手に屋外を楽しむ姿に感銘を受けたことです。

私は日本の庭で豊かな時間を創造する方法として、ウッドデッキの製造に取り掛かりました。現在、当社は全国向けに木製エクステリア全般の製造、販売を行っています。



木製エクステリア用品に使う木材を説明する泉社長(右)

世界的建築家・隈研吾氏に建築材を提供

当社が加工した木材は、主な取引先である越井木材工業株式会社(本社：大阪市)を通して、全国の建築物などに利用されています。

例えば、平成29年7月、東京スカイツリーの近くにグランドオープンした「ONE@Tokyo」は、伝統的な木組みと現代の工業素材を融合させた斬新なデザインが特徴的なホテルです。

このホテルは世界的な建築家・隈研吾氏がデザインを監修しました。隈研吾建築都市設計事務所とは木組みの施工方法についてともに検討し、完成時には大きな喜びを感じました。

また、平成30年3月に完成した群馬県富岡市役所新庁舎は、同じく隈氏の設計であり、木材の温かみを感じる空間が広がっています。今後は、隈氏による東京オリンピック・パラリンピックの新国立競技場建設などにも積極的に協力していく予定です。



平成30年3月に完成した群馬県富岡市役所の新庁舎外観
(撮影：泉社長)

最後に、碁盤、将棋盤の製造などへの想いをお聞かせください。

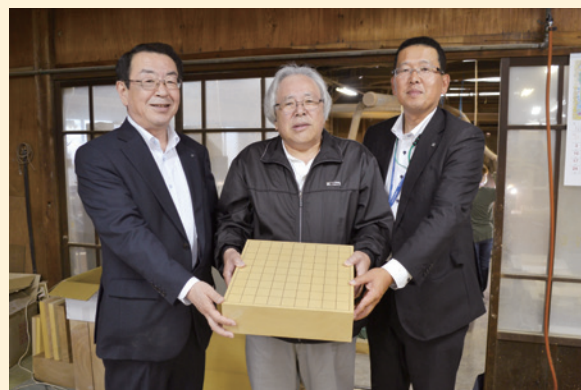
囲碁・将棋文化を守るトップランナー企業として

奈良・平安時代から日本で脈々と受け継がれてきた囲碁、そして将棋文化は、現在、日本だけでなく、世界にも広く普及しつつあります。

当社は囲碁・将棋文化を支えるトップランナー企業として、今後も碁盤、将棋盤の製造技術の向上、そして、次世代へ受け継ぐため、人材育成に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

また、木材を扱うプロ集団として、国内外の建築物をより魅力的なデザインにするため、木材加工部門を取り仕切る息子や職人たちとともに、さらなる事業展開に向けて邁進して参ります。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。



泉社長(中央)、土合支店柳橋支店長(右)と
聞き手・藤咲耕一